
メモリーはすぐそばに・・

かえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メモリーはすぐそばに・・

【Nコード】

N9174J

【作者名】

かえる

【あらすじ】

今私たちが暮らしている世界とは少々異なる歴史を歩んできた世界。日本。

そこには少し・いや、大分変わった高校生の女子二人組みが。将来がちらちらと見えてくる、それゆえ不安に思う心。家族内でのイザコザ。

馬鹿なことばかりやって生きて居たい・っと思っても、いつか来るは覚悟のとき。

その時、あなたならどうしますか？

天敵現る（前書き）

この小説に興味を持っていたいただき感謝です。

さて、この小説は、私の主観的で、偏見があるかもしれません。（世界の国々についての）しかし、あくまで一作品として読んで頂ければ幸いです。

天敵現る

序章

「私たち、もう高校2年生なんだね。」

「アア。早く過ぎちまうもんだぜ。人生ってのは。」

ふっ・・・と大人じみた笑い方をするのにはまだ少し早すぎたか・
・

私たちはとりにいく！あれを！あれを取れば、希望に満ち満ちた世界へ・・・

いくぞー！

「うおおおお~~~~！！！」

それはそれは、あつたかい日だった・・・桜も私たちにエールを送ってくれてる・・・そんな気がしたんだ。

私たちはいつきに駆け出した。テカテカと輝くそれに・・・

それを思い立ったのは、実に些細なことだった。

「教頭の頭は・・・ポマードくさい！」

つと、言う苦情が、私ら（県立西那高校 学生支援・環境係り）に殺到した。

*学生支援・環境係とは、まあ、一言で言ってしまうえば、学校生活面白おかしくしちゃいましょう！係。

目安箱に、私たちの机に、家のポストまで・・・苦情の手紙でたくさん溢れかえった。

「これじゃあ私たちが普通の生活送れないよ！」

「まったくだ。机とか・・・用具が入らないよ！ちっ！・・・こんな

「つたら・・・」

「こうなったら？」

「拭き取ってやる~~~~~!!!!!!」

「えっ!? ポマードを？」

「Yes・ポマード。」

「ティッシュで？」

「ばかもん！ティッシュだと手に滲みてきて付いちゃうかもしれないだろ！雑巾だ！雑巾で特攻よーい！」

すると、まわりでこの話を聞いていた生徒が、大慌てで雑巾を取りにかかった。

「いつやんの？いまから？」

冷静にたずねてくるのは、カンちゃん。中学生からの居なくてはならない大親友。今の私がいるのは、このカンちゃんがいたからと言っても過言ではないだろう。

「あたまえよ！善は急げだっ！」

「でも今日から教頭出張じゃん。明後日まで。」

「えっ、マジ？」

周りにいた生徒が一瞬固まった。明後日は、ちょうど終了式なのだ。

「知らなかったの？一昨日説教つけたときに職員室の黒板に書いてあったでしょ。」

「そんなとこ見てないよ・・・てかタイミング悪っ！」

ため息が教室に充満する。

そのため息とは裏腹に、私は良いこと（世間では悪いこととも言つ）を思いつき、おもわず顔がにやけてしまう。

「・・・始業式だ。」

「えっ？」

「こうなったら、始業式の日、大衆のまえで赤っ恥かせてやる！」

「こうなったらって、どうなったの？」

「作戦名、ポマードふきふき作戦！日にち、4月6日！時刻、10：00時！作戦決行！」おおー！

こんな感じで、ポマードふきふき作戦は段取りされた。

その日だって、・・・うまくいったんだ。・・・あいつさえ、この学校に転任してこなければ・・・。

メモリーはすぐそばに・・・

第1章 天敵現る

・説教のため校長室にて待機中。

例の作戦は、今、目の前にいる他の高校から転任してきた教師のせいで、あえなく撃沈。

（誰だ、こいつ。）

（知らないよ。転任してきた人なんて・・・）

こそこそと話していると・・・

「おい。」

？びくつ！

「おまえら、何年何組だ。」

「二年E組です・・・。」

「ふっ。そうか・・・。」

なんですか！？今の鼻笑いは！気味悪り々な。おい。

そんなことを思う私たちをよそに、そいつは質問を続ける。

「今度二年生になる、頭はいいのに、馬鹿ばっかりやってる二人組みて・・・おまえらか？」

「頭のいいのは本当ですけど、馬鹿ばっかりやってるって言われるのは、心外ですね。」

そう。私とカンちゃんは、学年考査でいつもトップを張っているのだ！だから周りの教師は、有名私立大に行けとか、一流国立大に行

けとかうるさくて……。私たちのことを、自分たちの点数稼ぎの道具としかおもってねえ。だから教師は嫌いなんだ。

「やっぱりおまえらか……。今時の女はこんなことやるのが流行なのか？」

「今時の女って、そこらにいるやつと一緒にしないでください！」

「そうですよ。私たちは、庶民にはできないことをやってるんです。」

「わたしと言ったあとにカンちゃんがつづく。その時、校長室のドアが開いた。」

「おーおー、またやってくれたね。諸君。」

「かつたるい声を出した校長のあとに、教頭が続いて部屋に入ってきた。」

「しょーがないでしょ。目安箱だって、私たちの机だって、苦情の手紙で溢れちゃったんですから。」

「……またそれかね。」

「ふーっと、あきれたようにため息をつく教頭。（お前が原因なんだよ！加齢臭とポマードの臭いが混ざったおかげが！）」

「苦情？なんだそれ。」

「転任してきた教師がたずねる。彼が知らないのも無理はない。去年私たちが、独自に活動を開始した例の係りのことを。」

「教頭先生の頭が、ポマード臭い！と。いったいどれだけつけてんだ、とか。」

「その苦情がものすごい量きたんです。これは、改善しないといけないと思って……。だから、拭こうと思ったのです。」

「雑巾はその為かと納得するように、はあく、っという校長。教頭の顔が、引きつっているのがよく確認できた。そういう顔されると、うれしくて仕方がない。Sなんだろうか、自分……。」

「君たちは、なんか……。何回そういうことをやれば気が済むんだ！」

（囁んだ、かんだよ。ぶつぶ。）（華蓮、いま笑うな！）

小声で言われたことが聞こえたのか、赤面する教頭。

「まあ、まあ。君たち、そういうことはもっとソフトに相手に伝えるべきだよ。行動が早いのは良いけど、会話って言うのも大事な手段だよ。教頭先生も、んゝ。ちょっと気をつけるように。最近ほんとにひどいから、におい。」

教頭のフロアに入ったかと思いきや、教頭を諭す校長。校長だつて思ってたんじゃない。内心つぶやく。そろそろ押し寄せる笑いの波に耐えられない。

「吉田 華蓮君に、神田 千沙君。もういいから、君たちは教室に行つてなさい。」

「はい。」

そうして部屋を出ようとするときに、あの教師がこつちを見ていることに気づく。私には、ほくそえんでいる様にしかみえなかった。

「あの校長はいつも寛大な心をお持ちだね。」

「そうだね。私たちが停学とかなってないのは、あの人のおかげみたいなものだしね。」

「学校内のあんな小さな事で、停学にされてたまるかよ。」

教室へむかっているとき、こんな無駄話をしていた。

「しかし、あの先生、目つき悪かったね。」

あの先生とは、転任してきた教師のことだろう。わたしはうなずいた。

「あのラリーアット。めっちゃいたかった。」

あの時、教頭に向かって走り出したとき、ひとりの邪魔者が現れた。全力疾走していた私たちの目の前に、腕を広げた巨人が・・。

そのまま止まりきれず、腕につっこみ、転倒して頭を打った。そのまま引きずられ、説教部屋（校長室）へ・・・。

「おでこと後頭部が痛い。」

「くっそ。あのやろー。あそこまで簡単に私が技を決められたこ

となんてなかったんだぞ！わたしの名前に傷つけやがって！要注意人物にリストアップだ！」

教室についたらみんなからのブーイングがひどかった。任務完遂できなかったからである。しかし、臭いを抑えるように話してきた（校長が言ったんだけど・・・）ことを伝えると、ブーイングはおさまった。そしてみんな、担任はまだかと、待ち構えている。

この学校では、始業式での担任発表はなく、式の後で来る先生が担任の先生となる。みんなときどきしながら待っているけど・・・。「ねえ、カンちゃん。思うんだけどさ、もしかしたら、あいつが・・・担任じゃないかなって。」

「えっ？さっきの、転任してきた人のこと？」

「そう。だって、私たちの組を聞いて鼻で笑ったり、部屋でてく時にはくそえんだり・・・。絶対あやしい。」

「ごくっ・・・それも、そうだね・・・。」

「あっ！！誰か来た！！」

びくっ！！扉に一番近い席のやつが叫んだ。教室内にいるみんなの胸が高鳴り、緊張していた。私たち二人は、別の意味で緊張していた。

ガラッ

ドアの開く音・・・。

下を向いている視線を上にあげれば・・・

「「あ~~~~っ！！！」」

やつぱり。私の予測は100発100中だけど・・・今回だけは、ハズレてほしかった。。。

「なんだよ、いきなり叫びやがって。あ。おまえら、あの二人か。」
「わかってるくせに！」

周りからはこの教師が、かっこいいだの、渋くていい感じだの、聞こえてくる。

気をつけるみんな！こいつは、中身はきつとかっこよくもなるとも

ねー！！ラリーアットされるぞ！目をまともに合わせたら、石化するぞ！

「あゝ、みんな静かに。今日から一年間、君たち、2年E組の担任になりました、渋沢 隼人です。前は、隣町の高校に勤めていました。担当教科は、理科の生物です。このクラスは理系だよな？理科の生物は先生がやることになるので、よろしくおねがいします。」
まじか……。よりによって担当教科が理科の生物だなんて……。
私の一番好きな分野だし。。

「嫌いになりそうだ。」

「ん？どうかしたのか？」

隣の男子が話しかけてきた。何にもないと、軽く受け流す。

（いやな予感が・・・）

その時、その予感が見事的中することを、私は知る由もなかった。

天敵現る（後書き）

序章・第一章を最後まで読んでいただきありがとうございます。

私もこんな馬鹿な高校生活を送ってみたいものです。

これからどんどん更新していくので、先が気になっちゃう人はぜひ読んでくださーい！

新入部員

「華蓮！おはよ。今日も元気もりもり森万！」

「・・・お〜。」

「なに〜？その元気のなさ。いつもならこの台詞はあんたが言うのに・・・。」

登校途中に、いつもこの酒屋の前でカンちゃんに会う。そう、カンちゃんの家はこの酒屋。親戚の家らしい。カンちゃんの両親は海外で仕事をしているため、時々しか日本に帰って来ない。だから、普段は学校に近い、親戚の家に下宿させてもらっているらしい。

中学校の時からそうだったな。私は中学入学と同時に、この町にやってきた。ここまでカンちゃんと親しくなったのは、家が近かったのもあるのだろう。

「元気も無くなるよ。あの担任じゃさ。」

「何もそこまで毛嫌いすることないじゃない。ラリーアットされたくらいで。顔はいいんだし、いつそのこと仲良くなっちゃえばいいじゃん。」

「顔はいいって、それにみんな騙されるんだよ。だいたい、あのおっさんのどこがかっこいいんだ！？それに・・・今までの教師となんか雰囲気違うし・・・。」

「べつに、雰囲気違うからって、何か害があるわけでもないでしょ？」

「・・・。私たちの活動を邪魔されたらどうすんだ。」

「えっ。それはいやだ。」

私たちの活動（例の係り）は、あくまで部活のようなものとしてや

ってきた。いまだに部員数は増えないが、今年こそ新入部員をゲット！と、意気込む私たちを、あいつに邪魔されたらどうする！？

「新入部員どころじゃなくなるね。」

「唯一の青春が奪われる……。」

別に、あいつにかぎって邪魔をされるわけじゃないけど、担任で、監視しやすい立場にあるら……。

「はあ……。」

そんなはなしをしているうちに、学校に着いてしまった。

「近すぎるって言うのも……また一つの悩みだね。」

「贅沢な悩み……。」

私がこの学校を選んだ理由は、立地条件がいいから。（近かったからともいう）家から歩いて5分以内。

ここ、県立西那高校は、県内2位の学力を誇る進学校だ。ここに来る事を夢にする子も少なくない。そのため結構遠くから来る子もいる。

だからこの学校の生徒は、朝から疲れきった顔の人が少なくない。特に通いられない1年生は……。

「おはようございます！先輩！」

通いられない1年から、いきなり後ろから挨拶されたのでびっくりした。

「あ、ああ。おはよ。」

「どうやら周りがさわがしい。・・・私たち、注目されてる？」

「あれって、昨日の人だよね！」

「あつ！本当だ！」

「すげーよな。始業式であんなことやるなんて。」

「あれ、教頭先生の頭、拭こうとしたんだって。」

「1年は私たちの話で持ちきりのようだ。ふっ・・・有名人に、なっちやった？もしかして。」

「おい。カンちゃん。面白がって、入部したい奴、来そうじゃない？」

「・・・どうだろ？」

放課後！

今日は半日授業だったので、ほとんどの人は、午後から部活で、教室を出て行く。

私はカンちゃんと一緒に購買のパンを教室で食べていた。

「おい、吉田。今日も活動してくのか？」

クラスメイトの仙崎くんに話しかけられた。

「ん？もちろんだよ。これがないや、今は生きてられないね。」

「そうか（笑）。しかし、よくやるよ。まあ、君たち見てると楽しいけど。」

「見物料とるぞ。よくやるよって、頼んでくるのは、そちらさんで

しょ？」

「まあ、そうだが・・・処分を受けない程度にやっとけよ。」
「ご心配どうも。」

千崎くんは教室を出て行った。あの子はよくこの部のことを心配してくれる。が、入部してくれない。まあ、剣道が強いから頑張ってるんだろうなあ。

「ねえ、今日なにやる？」

「とりあえず、教頭の頭の臭いが治まったかの確認と、・・・いや、それだけか・・・。」

「・・・。」

「どうしたの？」

「渋沢先生、今日なにもしてこなかったじゃん。」

「確かに・・・、別にこつちを気にしてる様でもなかったし。。ただの思い過ごしかな・・・。」

「きつとそうだよ。華蓮はいつも考えすぎ！」

「そっそっかなあ？でも今日は二日目だし・・・。」

私が言い訳しようとした時、教室のドアが開く音がした。そちらに目をやってみると、

「しつ失礼します！あ、あの、吉田先輩と、神田先輩って・・・。」
「私たちだよ。」

カンちゃんが手を振る。その子は緊張しきった様子だ。何をしに来たんだろ。

「どうしたの？」

「えっ、えっと、その、先輩たちの活動の内容を、詳しく知りた

いなくって思つて・・・」

なんと！入部希望者！？いきなりか！？いきなりゲットだぜ！！
夢にまで見た新入部員。逃すわけにはいかない！

「マジで！？入部？入るのね？じゃあ、ここに名前と、クラスと、
電話番号書いてー！」

「私たちの電話番号これだから！よろしく！」

「あああの、その前に、内容を聞こうと・・・」

「内容？ああ、あそこに置いてある箱とか、机の中に、みんなからの要望が書いてある紙が入ってるから、その内容を見て、それを私たちが支援するんだよ。ジャンルを問わずね。」

「は、はあ。活動は、どれくらいの頻度でやってますか？」

「頻度？頻度ね・・・手紙の数にもよるけど・・・マア、土日はほとんどないよ。」

「そうなんですか・・・。」

「名前は？なんていうの？」

「・・・荒城 竜也っていいます。」

「竜也君ね。私は、知つてのとおり、吉田華蓮。こっちは・・・」

「神田千沙だよ。よろしくね。」

「よ、よろしくおねがいします。」

荒城竜也くん・・・ちよつと線が細いけど、十二分にあなたの能力使わせてもらえますよ。

「じゃあ、さつそくだけど、やることがあるので・・・。」

「ええ！？まだ入るとは・・・言つてない・・・」

「えっ？よく聞こえないから、その発言却下。」

「よろしく願いしますって言つたじゃん。」

「言いましたけど・・・それは・・・。」

。（半ば強制で）新しく部員となった、竜也君。初任務は早々に・・・。

「Commander・This is Tatu・I discover a target・（先輩！こちら竜也です。教頭を発見しました。）」

「Roger・Start mission・（わかった。任務を開始せよ。）」

「Be careful・Tatu！（気をつける竜也君！）直接嗅ぐなよ！手で仰いで嗅ぐんだ。」

携帯電話って、私の事情関係なしに鳴るから、あんまり好きじゃないけど・・・、こういうときは役に立つな。電話代がかかるって？それが、みんな同じ機種だったんだよ。ラッキー。あつ、英語で話してるのは、単に私が、戦闘機パイロットみたいな通信がしたい！って、言ったから。英語の勉強にもなって、一石二鳥！

「Roger・一旦切ります。」

切ります、といってもしゃべらないだけ。この学校は基本、携帯電話の使用は禁止されている。（持ち込みはいいけど）

使つてるところを先生に見つかったら、取り上げられちゃうからね。

「Smell checked・（臭い確認しました。）先輩たちが言っていたより、臭いが治まったようです。」

「Really? The mission is complete・Please, come back・（ほんと？任務完了。戻ってきて！）」

「Roger・（了解です）」

ふい〜っ。これで苦情も無くなるだろう。

「よかったね。校長先生は偉大だな。」

「そうだね。今回も難なく解決!」

私たちは安堵の息をついた。しかし、そこで油断は禁物だった。

「Excuse me? The mission is complete, isn't it you? It's wonderful! (すいません。君たち、任務を完遂したんだって? すごいじゃない!)」

突然聞こえた声。それは電話からの声ではなく、実にリアルに、私たちの後ろから聞こえた。

ゴクッ。

「さっ、Thanks!」

私は後ろを振り返ることができず、その相手に背を向けたまま言った。

「What mission? (どんな任務?)」

答えられるわけがない。私はカンちゃんと顔を見合わせた。するとカンちゃんがうなずく。逃げるぞ! 5、4、3、2、1・・・

「GO!!!」ダッシュ!!!

「Tatu!!! Run! Run! (竜也君! 逃げる! 逃げるんだ!)」

「

「Say again?（な、どうしました?）」

「待てこら~~~~!!!!」

後ろから追ってくる影、それは渋谷先生だった。

「なんであいつがいるんだ~~~~!!??」

「こつちが聞きたいよ!!」

「お前たち、逃げたってどうせ一緒だぞ!」

そんなことを言われたときにはもう遅かった。前から走ってきた竜也君とぶつかり、目の前が真っ白になった。

新入部員（後書き）

二話目投稿！読んでいただいた方に感謝。

楽しい学校生活の中にもそれを脅かす黒い影（笑）。

新キャラが登場しました。仙崎君のほうはこれから活躍させるつもりです。かつこよく。

まだまだコメディーな感じですが、これから思わぬ方向に！って感じで書いていきます。

次回もお楽しみに。

何の菌？

・ねえ、母さん。父さんって、どんな人だったの？

朝だ……。またあの夢を見た。時計を見たら7時だった。いつもは6時半には目が覚めるのに……。この日は遅かった。

朝食を済ませ、授業の用具をかばんに詰めようとしたら、時間割表を学校に忘れたことに気がついた。電話で誰かに聞こうと思ったが、昨日のあの事件で、担任の渋沢にケータイを取り上げられてしまったので誰にも聞けない。

（まいったな。うち、固定電話ないし……。とりあえず、ありそうなもの詰めて、カンちゃんちに行って聞こうか。）

母の遺影に手を合わせて、わたしは自宅をあとにした。

カンちゃんちまでの道のり、私は今朝の夢のことを思い出していた。母さんが亡くなってから、よく見る夢。母さんに、自分の父親のことをたずねる夢だった。私の父親は、私が3歳の時に家を出て行って、それっきり帰ってこない。医者でドイツ留学をしていた、ということだけは知っているけど、他の事はわからない。離婚しているのか、なぜ出て行ったのか、今生きているのかも……。唯一の情報源は、母なのだが、二年前に亡くなってしまった。ウチは親戚とも遠縁で、実質、私は身寄りが居なくなってしまった。

今は、母の保険金と、自分のバイト代で生計を立てている。

（まあ、めっちゃ楽しい毎日を送ってるけどね。）

とか思ってたなら、酒屋の前を掃除しているカンちゃんを発見。

「あらー華蓮ちゃん。おはよう。」

「おはようございます！カンちゃんも、おはよ！」

カンちゃんの親戚のおばちゃんが挨拶をしてくれた。カンちゃんはえらいなあ。毎朝店の前の掃除をしているなんて。いつも思う。

「おはよつ。華蓮。どうしたの？今日早いね。」

「実はさー、時間割を学校に忘れてきちゃって……。今日から通常授業でしょ？予定がわかんなくって……。」

「ケータイで聞けばいいじゃん。それ。」

「忘れたの？昨日、取り上げられたでしょ？」

ああ、というと、カンちゃんは近くにあった自分のかばんの中から、時間割表を取り出した。

お礼を言い、用具を確認していくと……。

「やっぱり今日、生物あるのか。」

「ケータイ、返してくれるかな？」

「さあ……。あの先生、よくわからんから。」

「えー、今日から通常授業が行われます。お前ら、ちゃんと用具持ってきてるか？ちなみに、僕の授業で忘れ物すると、アメーバについでレポート10枚提出ね。A4用紙にだから、みんなちゃんと持って来いよ。」

いや、A4とかじゃなくて、アメーバってところでみんな嫌だと思う

だろ……。ほんとにわけわからんやつ……。

「華蓮、よかったね。あさに用具確認しといて。アメーバのこと書かずに済むじゃん。」

「うん。ありがとうね。でも、わたしはアメーバ嫌いじゃないぞ！10枚くらい……多分書ける。」

「まじで！？そっすえば、そっすいの好きだモンね。私は、好き嫌いの前に、どうでもいいけど。」

「アメーバは、単細胞で基本的に鞭毛や纖毛を持たず、仮足で運動する原生生物の総称である。また仮足を持つ生物一般や細胞を指してこの言葉を使う場合もある。ギリシャ語で「変化」を意味する $\alpha\mu\omicron\iota\beta$ (amoiβ) に由来する。アメーバという語は意味が広いため、まず分類学的にもまとまっている典型的なアメーバについて説明す……。」

「はいはい。好きなのはわかったから。っていうか、ケータイどうするの？先生出てっちゃうよ。」

「あっ！そうじゃん！ぶん取ってやるぜ！」

「なんでいつも、そう乱暴なの。」

「あっ。吉田と神田は、今から一緒に職員室に來い。」

くだらない会話をしているうちに、呼び出しをくらった。

「反省しています。許してください。」

「……。そんな棒読みの言葉はいらん。」

「反省はしてますよ。次からは、ちゃんと周りの警戒を怠らずに使用します。」

「ひらき直んな。」

「「……………」」

「……。」

一時限目。総合学習の時間。私たちは説教を受けているため、職員室にいる。ここに来ると、いつも思うことがある。

稲垣（先生）の机の上汚い！！！！

どうしたらあそこまで汚くなるか考えてしまふ。ああ教材が。山積み
の教材がメトロノームのようにリズムを刻む……。

「どこ見とんのじゃあ！！！」

「はっ！すいませんでした！」

反射的に謝ってしまった。しかし、びっくりした。怒鳴ったのはじめて見た。って、学校はじまってまだ3日かあ。ここまでのスピードでこの人を怒らせたのは私が人類初なのかな？

「って、そんなことはどうでもいいけど、ケータイ返してください。お願いします。」

「そんなこと？？どんなことだ？」

「しまった！また私は夢と現実の狭間でゆらゆらと……」

「華蓮！それも声に出てるよ！」

「……拉致があかん。」

ふつと、深いため息をつく。渋沢先生は私たちに、理科の実験でよく使うペトリ皿を、ラップがかかった状態で渡してきた。中には液体が確認できた。

「お前ら、困った人を助ける係りなんだよな？」

「はい？いやちよつと、先生は助けませんよ。」

「先生じゃねえ。昨日ちよつとなあ、科学部にお邪魔したら、ここに入ってる菌が何かわかんないって、泣いてすがって来るやつ

がいてなあ。俺は、いろいろ忙しいから断つたんだが、そいつが、お前らに頼めないかって言ってきたなあ。」

「それを調べるのが、科学部の仕事でしょ!？」

「そうですね!科学部はいつたい何を科学してるんですか!？」

「俺に言われても……。なあ?」

渋沢は菌に話かける。

「いろいろ忙しいって、昨日私らを追いかけてる暇あったら、調べればよかったじゃないですか!」

「いろいろあるんだ……。先生つてのは。」

「なんだとお?」

「お前らの頭の良さを買って頼んでるんだ。光栄に思え。」

この上から目線が超む・か・つ・く!!

「一週間だ。」

「はあ?」

「一週間でわかったら、ケータイ返してやる。」

今度は何を言い出すかと思ったら……

「このやろ……。やってやろうじゃんか!!一週間で!」

「か、華蓮?」

挑発に乗ってしまう私に、またかとばかりにあきれた声を出すカンちゃん。

「ほう……。なかなか頼もしいな。」

「ちよつ、ちよつと!一週間じゃ無理だって!せめてもう一週間な

いと・・・。」

「もし本当にできたら・・・、焼肉を、おごってやってもいいぞ。」

「「焼肉!?!」」

焼肉でつられる女子がいるかと思うかもしれないけど、私たちはだいの焼肉好き。バイト代が入ったら必ず食べに行くほどの。

「本当ですね!?!私は四州亭がいい!?!」

「えっ!?!ここは豪華に、ジャジヨ苑にしようよ!?!」

「よし!決まったなるととと教室もどれ!おれは資料を印刷してから行くから、それまで待ってるとみんなに伝えておけ。」

「Roger・まかせてください!?!」

そして私たちは職員室をあとにした。

「・・・あいつら、本当にやるつもりなのか?あはは。まさか、一週間でなあ・・・。学校だってあるし・・・。」

「よしっ!いくぞ!?!」

「おおっつて、どこに行くの?」

帰りのS・Tが終わり、みんなは部活の時間。私たちが向かう先は・・・、

「決まってるだろ!隣町の農業大学だよ。」

「農大!?!確かに、そこに行ったらこの菌がなにかわかるかもしれないけど・・・。いきなり入って行ったらまずいでしょ。」

「先輩、菌ってなのことですか?」

「ん？気にしないでいいよ。」

「いや、気になります。」

「それより、農大のこと！」

「ああ。昼休みにアポ取つといたから。あそこ、知り合いの教授がいるんだよ。今の時期暇らしいから、付き合ってもらえるって。」

隣の農大には、お母さんの知り合いの教授がいた。小学校くらいの時、よく顕微鏡をのぞいては、いろいろなものを見せてもらった。

「農大は動物いっぱいだからね。そこで遊んでたら、嫌でもいろんなこと覚えるよ。」

「なるほど。華蓮の生物好きはそこから始まったんだね。初めて聞いた。」

「へえ。いいですね。大学教授が知り合いとか……。それで、菌ってなんですか？」

「隣町っていつでもすぐそこだから、歩いて行こうか。」

「そうだね。」

「む、無視ですか！」

説明するのが面倒なので、竜也君には主要なところを飛ばして、

「これがなんの菌かわかったら、焼肉奢ってもらえるから。」

とだけいうと、

「僕、あんまり焼肉好きじゃないです……。」

のりの悪いやつめ。

「こんにちは！おじさん。」

「おお！よくきたね、つばめちゃん。」

「こんにちは。」

おじさんと久しぶりの再会。高校に入ってから、なかなか遊びに来れなかったからなあ。

「つばめちゃん？誰のこと？」

カンちゃんが聞いてくる。

「私のことだよ。おじさんは昔からずっと、つばめちゃんって呼んでくるんだ。」

「へえ。じゃあ、つばめ先輩、さっそく始めましょうか。」

「なにが、じゃあ、だ。」

「竜也君、いきなりうちらに対する態度が変わったね。」

「そうですか？」

たった一日でこの係りに慣れるとは……。荒城竜也、じわもの兵やのう。

「ところで、正体不明の菌ってどれ？」

私たちの会話を聞き、和んだ様子で話かけてきたおじさん。……。結構ふけたな……。

「これです。この正体を、一週間で明かさなきゃいけないんです。」

「一週間で！？そりゃ、高校生の君らにはきびしいね。」

「でも、焼肉がかかってるんだよ！ご協力願います！」

私がそういうと、おじさんはダンディな声で、あっはっは、と笑った。

「じゃあまず、プレパラートに菌を取って、顕微鏡で形を観察しようか。」

そういつておじさんは道具をあさりだす。そして私たちもそれを手伝い、焼肉とケータイを賭けた研究が始まった。

一週間後。

渋谷先生は、自分の机の上に一枚の紙が置いてあることに気づく。

「放課後、第二理科室に来てください」、だあ……。あいつらじゃねえか。語尾にハートマークなんかつけやがって。」

そうして、一週間前に私たちに菌を渡したことを思い出す。

「ああ。その手紙、ぼくが、吉田さんと神田さんに頼まれたので、置いておきました。」

横から渋谷先生に話しかけてくる机の汚い稲垣。渋谷先生は、まさか……。っと、思ったに違いない。その証拠に、あせった様子で第二理科室に入ってきた。私たちはその様子を見て、にんまり笑いながら言った。

「どうも、先生。私たちのケータイと、お財布をちゃんと持ってきましたか？」

「どうぞ、お座りください。」

カンちゃんの言葉と同時に、竜也君が椅子を引く。

「ここにどうぞ。」

渋谷先生は、竜也くんに誘導されたところに座る。

「お前ら、まさか・・・、本当に・・・。」

「もちろん。私たちに不可能なことは、こういった菌を肉眼で見ることくらいですから。」

「・・・。」

「この菌の正体は・・・。」

それから長々と、嫌って言うほど丁寧に、菌のことを渋谷先生に説明した。この菌の正体は、みんなのお腹に優しいビフィズス菌だった。なぜそんなものが科学部のところにあったのかは知らないけど・・・。渋谷先生は、参ったといわんばかりに落胆した。まさか高校生に一週間で当てられるなど、夢にも思ってたのだから。

そして無事、ケータイは戻ってきて、焼肉もたらふくご馳走してもらった。

「やっぱりうめ～な。高い肉は！」

「うん。しあわせ。」

「しかし、自分が金を負担しないととなると、うまさ倍増！あつ。店員さん！上カルビもう一人前ね！」

「まったくだよ。あつ！塩タンも！」

「おおお前ら！食いすぎるな！あつ！その肉俺が育ててたのに！あ

あ！キムチがもう無い！」

「あ。すいません。僕が食べちゃいました。」

「先生！ビールがもう無いじゃないですか。もっと飲んでくださいよ。生大ひとつ！」

「ウーロン茶もお願いします。」

「ビールはもういい！ウーロン茶？水を飲め！お前はたれで机汚すな！きれいに食べる！」

「僕の担任の稲垣先生の机よりきれいですよ。」

「おまえ、それは・・・先生たちの中には、暗黙のルールってのがあつてなあ・・・」

「この肉もゝらい！」

「あつこら！」

そして嵐のような焼肉パーティーはお開きの時間に・・・金が・・・とか、悲しげにつぶやく先生に向かって、元気に、最大の感謝を込めてご馳走様でしたといった。（ちよつと嫌味っぽくなっちゃったかな？）

しかし・・・レジで会計をしている時に渋谷先生の顔が、泣きそうながらも、わずかに嬉しそうに見えたのは、私だけだろうか。

何の菌？（後書き）

三話目。

主人公の過去がちらり。

大学教授が知り合いつていいな（笑）。

読んでくれ方、感謝です！

まだまだ続きます！お楽しみに！

参考出典：w i k i p e d i a

私の部活。

水曜日は私の大好きな生物の授業がある。しかも二時間続けて。やったー！つと、喜びたいところだが・・・なんせ、今年からいやな奴が担当の先生になってしまい・・・

「次の時間生物じゃーん。」

「やったね！華蓮の好きな生物じゃん！なんでテンション低いの？」
「・・・わかってるくせに。」

カンちゃんにわざとらしく言われ、余計にしずむ。人事だと思って楽しんでるよ。

「第二理科室にGOー！！」

「はぁ・・・。」

強引に腕を引っ張られ、理科室へと連れてかれた。時は六月。ちょうど梅雨時で、じめじめむしむし・・・私の一番嫌いな季節。プリントに文字を記入すると、腕の汗で腕にプリントがくっつくのが嫌い。大嫌い！そしてあいつの妙に生き生きした顔を見ると、

「余計にイライラするんだよ！」

「何を急に言い出すの！？びっくりするなあ」。授業前からそんなんじゃない、今日はひどいね、きつと。」

私に突っ込みながら一人で納得してるし・・・。

今日の授業の題目は、「細胞膜の性質を理解する」。
赤タマネギを使い、各濃度におけるスクロース溶液中での原形質分離を観察する実験。

「赤たまねぎ使っぞ。赤たまねぎ。」

と言いながら、野球部のいがぐり坊主の頭をぐりぐり撫でる洪沢。

「俺は黒いですよ!」

「ん? 日焼けしてんじゃねーか! 赤い赤い。」

そのやり取りにクラスの皆が笑う。

「爆笑、赤あたまねぎ!」

隣のカンちゃんは馬鹿笑いしている。こいつの笑いのツボは、もう5年くらい付き合ってるけどよくわからん。ひとり無表情でいると・・

「おい吉田」。暇そうだな。ちょっと手伝え。このプリント配つてけ」

ほら来た理不尽アタック。

「別に暇してたわけじゃないですよ! ええ!? なんで私が? もっと自分と席が近い人に頼めばいいじゃないですか。」

「いやだ。だっってお前今、またつまらんおやじギャグ言ってるよこいつって思ったる」

今のはおやじギャグだったのか!? そう突っ込みたくもなる。

「思っでないですって。だっていつものことじゃないですか。そう思う心もなくなりました。」

「ほら思ってる〜！これだから・・・」

そこでいがぐり坊主が、

「奴はいつも優しそうな顔して、裏で何を考えてるか全くわかんないですから・・・気を付けたほうがいいですよ。」

余計なことを・・・

「まじか！おお、貴重な情報ありがとな。まったく、こわいねえ〜。それで何人の男を騙してきたのか・・・。」

「騙したことなんかねえ〜！！！野球部、お前は黙つとけ！！あんたは早く実験機材持つてきな〜さい！！」

怒り狂い、敬語とタメ語がごっちゃに・・・授業のたびにこんなことされたらたまったもんじゃない。いじられ役？いじめられ役なのか私は・・・。

「派手に怒ったね〜、今日は。前回のドイツ語喧嘩も驚いたけど・・・。今日もびつくり！あんたら変わってるわ。あと、凸凹コンビ！コントでもしてんのかつてくらいトントン進んでく。」

「まさかあいつもドイツ語しゃべれるとは思わなかったなあ・・・。って、コントなんてしてないよ！何が凸凹コンビだよ。」

放課後、教室で雑談。いや、部活。

「許さんぞ！私以外の人とコンビを組むなんて！」

「・・・自分で言っただろ。」

くだらないことを話している横で、まじまじと私の顔を後輩が見てきたのでどうかしたのかと聞いてみる。するとこう言った。

「先輩、ドイツ語しゃべれるんですか？」

そういえばこの子には何も話していなかった。

「うん。しゃべれるよ。」

「カレンは独学で覚えたらしいよ。英語だけ喋れてもしょうがないって。」

「すごい...というか、英語だけでも十分だと思いますけど...」

「だめだよ！今の時代は三カ国語喋れなきゃ！ホントは中国語やりたかったけど...家にドイツ語の本があったからそれで勉強したんだ。」

へえーと二人が。カンちゃんにも言っただけだったことだ。

「なぜ家にドイツ語の本が？」

「うん。そこ不思議。」

「なんでだろ？私もよくわかんないけど...お母さんが大事に保管してたんだよ。」

何故だろう。何故母はあんなもの持っていたのだろう。亡くなった今は聞く術もない。ただ本当に大事そうに保管していたんだ。思いにふけていると、勢い良く教室のドアが開く。

「吉田！剣道場の前にカメムシがいっぱい死んでるんだ！手伝ってくれ！」

「千崎君！カメムシが？」

今日の任務はカメムシ処理。

「なんでうちらが・・・剣道部でやれよ！」

「わりい。みんな気持ちわるがって・・・」

「気持ち悪いだど！！カメムシだって私たちと一緒に、生き物だぞ！私はこの形が好きなのに・・・」

「・・・それは華蓮だけだよ。虫とかホント好きだね。」

「わー緑だらけ！こんな光景はじめてみました。」

ほうきとちりとりを使い集める。なぜこんなに大量に・・・。剣道場の臭いをかいで大量死してしまったのか！？

「本当にすまん！恩に着るよ。」

「いいよ、こういうことやるのがうちの部活だし。」

いまふつと思っただけど・・・変な部活だな。これ。

10分くらいで作業は終了。これで気負いなく剣道の稽古に打ち込めるだろう。

「きれいきれい。これでOKですね。」

「うん。みなさん、お疲れさまでした。」

「ありがとな。手伝ってくれて。助かったよ。」

ふっつと安堵の息をつく千崎君。道場ではもう練習が始まっている。

薄情な部員だな。

「しかしなんで他のやつは手伝わないんだ？無視かよ。」

「先輩たちは総体の県予選がもうすぐだから・・・焦ってるのかも・・・」

「いや・・・それにしても・・・千崎君だって出場するんでしょう？条件一緒じゃん。」

そんなことを話していたら、3年の主将がこちらにやってきた。

「よう。ありがとよ。学生支援係りさん。おい仙崎！お前のせいで迷惑かけたんだぞ。まったく、お前はやることが鈍いんだよ。なにレギュラー・・・ふざけたやつだぜ！お前は外でランニングでもしとけ！」

なにに、どうやらこれは・・・いじめ？二年で早くもレギュラーになった千崎君に対しての・・・三年生は10人もいるもんなあ・・・。

そう考えていて、カンちゃんのほうに目をやったら、何かを訴える目で見つめ返された。達也君のほうを向いても同じような反応だった。

さて、どう切り出そうか・・・そんなことを考えているうちに、仙崎君は暗い顔をして、外に向かおうとしていた。私は仙崎君の手をつかみ引きとめた。そして、

「部長さん。県予選はもうすぐなんですよね？調整は順調ですか？」

「お、おう。順調だぞ？それがどうした。」

「へえ・・・レギュラーに、竹刀も握らせずに、順調とはいいたものですか。」

部長の顔が引きつった。

「何が言いたい！掃除が終わったなら早く帰れ！この雑用が！」

今度は私の顔が引きつる。

「雑用じゃない！私たちは、学生支援・”環境”係りだ！！この校内に傷がついていたなら、この学校の生徒に困ってる人がいたなら、部内でくだらないいじめがあったなら、いつでもどこでもすっ飛んで、応援しに、改善しに行くのが私たちの部活だ！！あんた達のように部員としての誇りもなく、ただ棒を振って遊んで、後輩いじめてる部活と違って、部員としての誇りを持って、日々考えながら活動をしている！」

私が、ふーん！と胸を張る。そんなことでいじめに発展するなんて、武道家たるものあっていいものか！！！！

「この部の環境に異常があると判断いたしました。」

「改善させていただきます。」

そして二人が続いた。3人でまるで台詞分けでもしてあったかのようになり返す。すると、うるたえた様子で部長は言う。

「頼んでねえぞ！」

そしてまた私は言い返す。

「はい。頼まれてませんよ。」

その後、3年全員に私からの説教。口答えしたやつにはアイアンクローをお見舞い。（こめかみを手でぎゅーっとするやつ。もちろん面はずして）そんなことしている間に剣道部顧問が登場。事情を説明し引き継ぎ、現在やつらがどうなっているのかわからない。あの先生は怖いからなあ。無事であることを祈ろう。

帰り道、3人でアイスを買ひ、近くの公園で雑談。

「なーんか今日はじめじめしてるけど、気分はすっきりした！」

カンちゃんが言う。

「ええ。ぼくも。ツバメ先輩がああもガツガツ言ってくれると・・・」

「つばめいうな！そんなにがつがついってたか？抑えたつもりだけど・・・」

「全然抑えてない。」

二人に声をそろえて言われた。そうかなあーと頭をかいていると、達也君が聞いてきた。

「突然なんですが・・・お二人は、なぜこの部活を作ったんですか？」

急な質問に言葉が詰まる。そしてカンちゃんが答える。

「花蓮がさ、中学校のときから言ってたんだよ。高校に行ったら、こつという部活作るんだーって。だから一緒にやらないかって。」

そんなことを言っていた気がする。なぜそう思ったんですかと問い詰められる。そして自然と言葉が出てきた。

「人のためになることがやりたかったんだ。ほら、たいていの部活って自分が勝つためにとか、うまくなるためにとかそういう理由で頑張ることが多いでしょ？そうじゃなくて、もっと周りのためになることをやりたいって思ったんだ。そのほうが頑張れるから。まあ、人のためについていても、結局は自己満足だけだね。でも、人にも喜んでもらえて、自分も嬉しくなるんだったら、そっちのほうがいいから。」

言い切って、とつてもすつきりした。そうなんだよ。これが初心なんだよね。いくらくだらなことをやっていたって、それを忘れないきやそれでいい。逆に迷惑をかけることもあるかもしれないけど、その時はその時なんだろう。・・・今回は、むかついた腹いせのようになっちゃったかもしれないが・・・。

「なるほど。その考え方には、僕も賛成です。」

納得したように達也君が言う。その言葉を聴いて嬉しくなった。

「じゃあさ、なんで達也君はこの部に入ろうと思ったの？」

カンちゃん、私も聞きたかったことを聞いてくれた。

「僕ですか？僕は・・・中学ではパソコン部に入ってたんですが、高校にはなくて。ですから、部活は入らなくていいやーって思ってたんですが、あの始業式の先輩たちを見て、」

私たち二人は苦笑いする。

「あの行動は、部活の内容だったってほかの先輩から聞いたので、面白いなあとおもって除きに行っただけです。まさか入ると思っただけでした。」

「そうか！私たちが無理やり入れたのか！」

「そうですよ！仕方なく入ったんです！」

3人で爆笑する。そこまで面白くもないのに。

人のために何かするって、誰に教わったわけでもないけど、何でそんなことやっているのだろう。医者だった、顔も浮かばない父を思い出す。あんたとは何の関係も無いと、内心つぶやいた。

そして、何か考えようとしていたことも思い出せず、この一日は終わった。

私の部活（後書き）

剣道場の前がカメモシだらけ……。私は中学で剣道部だったので、これは実体験です（笑）。今日も稽古がんばるぞ！って張り切って剣道場に向かったら、なんとその前の渡り廊下はカメモシだらけ。稽古を始める前にみんなでお掃除。

それ以外にも、落ち葉や砂。春には黄砂で廊下がマツキッキ！台風の際はいつでもひどいものでした（笑）。

こないじめは高校に入ってから。友達が受けてました。こんな風に助けてあげればよかったかなあ……。

この世界の歴史（前書き）

一話目の前書き参照です。

外国の非難をするつもりで書いたわけではありません。
どうぞ、ご了承ください。

この世界の歴史

いつも通りの朝。TVをつけて朝食をガッツリ食べていた。ぼーっとTVを見ている。いつもとおんなじアナウンサーが、ニュースを読み上げている。そのニュースの中で、がつついて見てしまったものがある。

「今日で終戦10年目です。第二次太平洋戦争の追悼式典が行われます。……」

第二次太平洋戦争・・・10年目。私が小学校2年生の時に終戦した。

第二次太平洋戦争。私の唯一の苦手教科は歴史。世界史も日本史もだからあまり詳しくは無いが・・・、第二次世界大戦後、米国により、世界は大恐慌になってしまふ。しかし、米国は西側に責任があると、西側を非難する。それに対して西側も米国を非難。子供の喧嘩状態になり、ついにわがままボーイの米国は切れて、西側に対して宣戦布告をする。

二次大戦で米国に敗戦した日本は、米国と同盟を結んでいた（実質無理やり）ため、西側に攻撃を仕掛けると強要された。しかし、それまでにひどいことをされていたので、もうこれ以上言いなりにはなれないと、それを否定。そしてそれをきっかけに同盟を解除し、米国に対して独立戦争の名目で宣戦布告をする。

その日は13年前の4月。私はまだ3歳くらいだった。1996年4月13日開戦。その日の夕方に、父は家を出て行った。

思い出せない、思い出したくもない顔。母さんは私を寝付かせた後、一人で泣いていた。

「えー今日は皆さん知っていると思いますが、終戦記念日です。．．」

現代社会の時間。いや、そうでなくとも今日はこの話題で持ち切りだ。小さいころから聞きなれた出来事を、ただなんとなく聞いている。

「．．．いや、でも先生は、日本はすごい国だと思います。あんな軍事大国に勝利して．．．」

そう。第二次太平洋戦争で日本は勝利を収めた。しかし、勝ったのにもかかわらず、敗戦国に対して平等で対等な同盟を結ぶことを求めた。

仕返しをするのかと思っていたのだが．．と、世界中の国々が驚き、そして日本を愚かだという国も、評価すべきと言った国もある。

最初から日本はそのつもりで戦争をしていた。真の意味で独立し、関係の深い国々と対等な同盟を結び、友好を深め、日本を日本人の手で作直すと。その言葉は実行され、あの時掲げた理想の国家にすこしずつ近づきつつある。

そんな堅い話にも飽きてきた午後の授業。右隣のカンちゃんが紙飛行機を作り、私の机に向かって飛ばしてきた。中に何か書いてあるようなので開けてみる。すると、

「．．．馬鹿が．．見る．．」

隣でくつくくつと笑う声が聞こえる。いつものことだが、妙にむかつくんだよね。こういうの。この気持ちを誰かと分かち合いたい

と思い、そこにさらに書き加えて、斜め前の仙崎くんの机に飛ばす。
(うりゃっ)

ぽとつと無事にタッチダウン。驚いてる驚いてる。さあ、この気持ち分かってくれ！

「・・・ばかがみる・・・あんたも見たんか！ぷぷ・・・」

仙崎君が斜め後ろを振り返る。思わず目をそらして笑ってしまう。

(カンちゃんの気持ちがあった)

そして仙崎君がまた何かを書き加え、こちらに飛ばそうとしたけど・
・全然違う方向に飛び、クラスメイトの頭に刺さる。それを運悪く先生が見ていた。

「まったくお前らは・・・E組みの恥さらしめが！仙崎まで巻き込んで！」

社会の先生に怒られた後、さらに担任に怒られる。いや、今回仙崎君が悪いし！この方向音痴！

「戦争の話は飽きました。聞きたくない。」

私が不意にそうつぶやく。なんとなく気分が重くなり、胃がおかしい。どうしたんだろう自分。私の顔色が悪いのを察知したのか、先生が黙る。そして下から私の顔を覗き込む。

「すみませんでした！先生！僕も悪いんですよ。彼女たちだけ悪者扱いはよしてください。」

「あつたりまえだ〜！お前も悪いに決まってるんだろうが！」

その行動に私が責められてるのかと思ったのか謝る仙崎君。しかし先生の言葉に、えっ・・・って言うて固まる。

「先生。仙崎くんあんまりいじめないでください。彼けっこうデリケートですよ。ねえ？花蓮。」

私に同意を求める。うんつと首を縦に振る。なんか今日自分変だなあ。元気が沸いてこない。いつもなら余計なこといっぱい言うのに。そのことを先生とカンちゃんには気づかれたらしい。ケータイのときはものすごく長い説教だったのに、今回は、

「次からやるなよ。」

の一言で終わった。

部活の始まる前、仙崎君にもどうかしたのかと尋ねられる。そんなにおかしいらしい。今日の私。

「華蓮。今日は朝からボーっとしているね。どうかしたの。」

カンちゃんにも突っ込まれる。

「別に・・・そんなにおかしい？私。」

「いつもおかしいけど、今日はまともだから心配なの。」

「・・・貴様・・・」

今日は竜也君が来ない。連絡を取ろうと、携帯を開いた。そしたらメールが一通。

「竜也君からだ。」

「なんだって？」

「期末試験3週間前になったので終わるまで休めます。だあ？三週間前って準備するのはやいなあ……。」

「えっ？もう三週間前？早いなあ……。中間テストのときは何にも言わなかったのにね。竜也君。」

「そのときの結果が悪かったんじゃない？メールじゃなくて直接言えばいいのに……電話してみよう。」

勉強すると言ったって、私たちと話す時間くらいはあるだろうと思
い電話。三回のコールのあと、電話に出た。

「あつ。もしもし、竜也君？華蓮だけど……。」

そこまで話すといきなり罵声が聞こえた。

「おたくがうちの息子誑かしてるひとですか！！！！うちは勉強さ
せるために高校に通わせてるんです！遊ぶために通わせてるんじや
ない！テストのときくらいあなたたちも勉強しなさい！！」

ブツブツブツブツ……。切られた。

「カンちゃん、知らない人に怒られた……。」

「うん……。聞こえてたよ。電話に耳つけて無くてもね。」

そうか……。竜也……。母さんの軟禁地獄に耐えるんだぞ。結果を
出して認めてもらいなさい。
しかし三週間前は早いだろ。

「進学校だからね・・・レベルの高い大学狙ってるんだろうか。」
「そうじゃない？ 私たちもそろそろ将来のこと考えなきゃね・・・。」
「そうだね。 明後日、個人面談あるし、そこで答えられるようにしますか。」

先週から始まった個人面談。 一日5人くらいずつやっている。 明後日は私の番だ。 最近、自分の将来のことなんて考えることをすることもなかった。 なんだかんだいって、毎日が楽しかったから忘れてた。

楽しいだけじゃ、これから先だめなんだよなあ〜っと思い、嫌気がさした。

そんな短期間で答えが出るわけもなく、面談の日を迎えた。

「吉田〜。 入ってきていいぞ。」

その声が聞こえたので、部屋のドアを開け入り、渋谷先生と向かい合って座った。

先生は淡々としゃべりだす。

「お前は〜、学力は優秀。 今年のはまだ出てないが、授業点も高いとほかの先生から聞いている。 なぜ高いのか理解できんが、まあ、見方は人それぞれ。 おれの口出しすることでもないだろう。」

「・・・。 私は授業中は結構いい子ちゃんですよ。」
「うそつくな。 この間のはなんだったんだよ。 どうせばれないようにこそこそ悪いことやってんだろ。 意地汚い奴らだ。」

「あれはたまたまですよ。 私たちの心はとっても清らかですよ。 見せてあげたいくらいです。」

関係の無い方向へと会話が進んでいく。それを無理やり先生が戻した。

「で？将来どうすんだ？まず大学に行くと思うが・・・どういうことに興味がある？」

本題。私は何がしたいんだろう。生物のことには興味があるが・・・。

「好きな教科をあげるなら生物です。けど、これといって将来の夢はないです。」

うん・・・。っと、先生が黙る。わたしは先生が何か言うのを待っていた。すると、

「お前、人を助けるみたいなことやってるよな？そういう方向に進んだらどうだ？」

「はあ・・・人助け・・・ですか。ホームヘルパーとか？」

意外な盲点。そういう道もある。今まで気づかなかた。

「まあ、そういうの。公務員？警察とか、看護師とか、・・・医者とか・・・。」

医者という言葉について反応してしまう。

「なるほど。それもいいですね。しかし、私は国際的な仕事もいいなあと考えていたのですが・・・。」

それが二日間でやっと考え出した答えだ。一応ドイツ語がじつてるし……。

「ほう。そういえば、お前ドイツ語ぺらぺらだもんな。てかなんてしゃべれるんだ？」

「自分で勉強したんです。家にドイツ語の本があったから。それを訳しながら。実践したのは先生とが初めてですが。」

あの時喧嘩をしたが、内容はもう覚えていない。くだらないことだったなあ……確か……。

「Weil Deutsch pl?tzlich gespro
chen wird,Es war ?berascht.(突
然ドイツ語で話すからびっくりしたぞ)」

突然ドイツ語で話してきた。私もドイツ語で答える。

「Me,too.Weil es wieder in Deut
sch redet,,(私もです。ドイツ語で話し返されたか
ら……。)」

「Aber, Selbstausbildung., Es
ist wunderbar.(しかし独学か……。すごいな。)」

「

褒められた。素直にうれしい。
しかしひとつ疑問がある。

「先生はなぜしゃべれるのですか？留学でもしてたんですか？」
「うん？それはなあ……。秘密だ！」

私を見下すような顔をして言ってきた。

「ええ。なんですか。やましいことでもあるんですか？先生若い頃いっぱい悪いことしてそうですもんね。」

「俺は成績優秀、態度良好の学生だったんだ！おまえと一緒にすんな。」

「うつそだあー！」

「ほんとだあー！・・・それより、本題に戻すぞ！」

からかってんのかと思って、負けじと同じ質問を何回かしたけど、結局面談が終わるまでに答えてはくれなかった。

私は将来のことが少し見えてきてほっとしたが、それとは逆に、不安・・・ではないけど、深く考えてしまう事ができた。

何か隠している。最初から渋谷先生を見ていて違和感を感じたのは、このことなんだろうか。

教室の窓に滴る雨のしずくを見ながら思った。

この世界の歴史（後書き）

この話の独自の世界観の登場。一話目に書こうかと思いましたが、コメディーっぽくもしたかったのでカット。五話目に回しました。別にあの国が嫌いで・・・とかじゃなくて、設定上こうなっただけですので、非難するつもりで書いたわけではありません；

。（一話目の前書き参照です）

次回もお楽しみに！

二年前

昨日は気になることがあってよく眠れなかったといって、眠そうにしている華蓮。最近ちよつと様子がいつもと違う。別に疲れてるとか、病氣っぽいんじゃないくて・・・目の前で変顔しても反応薄し・。

「渋沢先生つて、結婚してないんだって！」

「そーなの！？うつそー！じゃあ私狙っちゃおうかなあ。」

「えゝ！私も狙おうと思ったのに！」

前にいる女子の会話が聞こえる。思わず突っ込んでしまった。

「あの親父のどこがいいんだ？目と頭大丈夫？」

するとその子達は私に言ってきた。

「えっ！？かつこいいじゃん！吉田ちゃんだっていつも楽しそうに話してるじゃんか！」

「楽しくねえ！」

「二人で二人だけの会話しちゃってさ！もう！どつという関係なの？本当は。」

「夜な夜な二人でドイツ語で言葉攻めしてるんだよ。」

「カンちゃーん！！何言つてんだよ！二人で言葉攻めっておかしいだろ！？変態か！S対Sかあ！」

「照れんなって。」

「・・・お前が一番かき乱してるゝ！！！」

カンちゃんは敵に回ってしまったのか！さっきの変顔のときのリアクションが薄かったこと怒ってるのかなあ？

・・しかし、なぜ結婚してないことが分かったのだろう。問い詰めたのかなあ。聞く前にうれしそうに話してくれた。

「あんね、先生の左手を良く見てたらさ、指輪してなかったんだよ。だから、結婚してないんですか」って聞いてみたんだよ。そしてたらさ、ああん？それはな、秘密だ。って耳元で言われたの！！

めっちゃ興奮してるし・・・。てゆうか、渋沢変態。

「ん？でもそれじゃあ、結婚してるかも知れないってことでしょう？」

「いいや、ああやってごまかすのはしてない証拠だね！間違いない。」

妙に自信にあふれたしゃべりかたをするなあ・・・。
しかしまた自分のことを人に言おうとしない・・・。なんかひっかかるんだよなあ・・・。

また華蓮が考え込んでいる。今日何回目だろう。先生が結婚してそうでシヨックだったのかなあ？いや、そういうわけじゃあなさそうだ。

その姿はいつかみた、あの時と一緒にだ。

・もう二年もまえになる。今でもたまに思い出しては思いに耽つてしまう・・・。

中学生のときに、華蓮とは出会った。家が近かったこともあり、一緒に登校するうちにとても親しくなった。家にも毎日のように遊びに行った。そのため華蓮の母、美代子さんとも親しくなっていた。

会ったときからすでに、華蓮に父親はいなかった。華蓮はその話をすることも無かったし、私から聞くことも無かった。

中学三年生になった頃、進路の話も一緒にし、美代子さんにも相談に乗ってもらったりしていた。

「カンちゃんはさー、行きたい高校あんの？」

「うん。今のところね。変わるかもしれないけど。華蓮は？」

「あるよー。私も変わるかもしれないけど・・・じゃあさ、ふたりでせえので行きたい高校言ってみようよ！」

「うん。いいよ。じゃあ・・・せえのっ！」

「「西那高校！」」

「あははは！一緒じゃねえーか！」

「まねかよ！近いもんねー。ここから。」

「うんうん。私もその理由。」

こんな感じで高校が決まって行つたなあ。今思つと超適当に決めてしまった・・・後悔はしていないけど。

二人に目標ができ、一緒に勉強に励んでいた夏のことだった。美代子さんが突然倒れ、救急車で病院に運ばれた。仕事中の出来事だった。

華蓮と二人、自転車をこいで30分かかる病院へと向かった。

着いた先で見たのは、ぐっすり眠る美代子さんの姿。過労で倒れたらしい。しかし、一週間後に出た精密検査の結果で、癌が全身に転移していたことが分かった。

華蓮はベットに横になる美代子さんの横で、静かに泣いていた。それを見た美代子さんが、彼女の頭をそつと撫でた。

「ごめんね華蓮。心配かけちゃって。すぐに元気になるから。」

「母さん……。無理させちゃってごめんなさい。もういいから、ゆっくり休んで。」

「千沙ちゃんも、この子に付き合ってもらって悪かったわね。でもありがとう。」

「いえ、そんな……。そんなこと気にしないでいいですから、今はゆっくり休んでください。」

それからだ。華蓮の様子がおかしくなったのは。無口になって、何か考え込んでいる。きっと美代子さんのことだろうと思うと、私が何かしてあげられることも無く、ただそんな自分に嫌気が差した。

それかしばらく経って、学校は夏休みに入った。美代子さんもそれと同時に、病院での治療では無く、自宅療養へと変わった。

娘と一緒に居たかったのだろう。そのとき美代子さんの体は痩せ細っていたが、自宅に戻ってくると、背筋をぴんと張った”お母さん”の姿も一緒に帰ってきた。華蓮も嬉しそうにしていた。

しかし華蓮も分かっていたのだろう。・・もう、そう長くないことを。毎年外で遊び呆けていたが、このときはかりは家に居た。

私もそれに便乗し、華蓮の家に毎日、朝から晩まで入り浸った。美代子さんのことが心配でもあるのだが、そのとき様子が変だった華蓮の事の方が心配だった。

そんな私も心も、この人には透けて見えたのだろう。

「千沙ちゃん。華蓮のこと、心配してくれてありがとう。」

それを言われたときドキツとした。お母さんにはかなわない。

「あはは。私は美代子さんのことも心配しているんですがね。毎朝ラジオ体操に出てこられたり、華蓮といえで大騒ぎしたり……。体は大丈夫ですか？」

そのとき華蓮は一人で買い物に行っていた。あいつが居るときは、娘の話なんかしたのを聞いたことが無い。

「私が死んじやっても、あなたが居れば安心ね。」

「何言ってるんですか！？まだ死んじやだめですよ！」

「いいえ、もうそう長くはないわ。自分の体だもの。私が一番わかっている。」

何を言ったらいいのか分からず、私は黙ってしまった。その間を力バーするかのように、美代子さんは続ける。

「千沙ちゃん。お願いがあるの。……あの子のこと……。」「

「な、何でしょう？」

突然のお願い。戸惑う私。しかし、それが何でも引き受けるつもりだった。

「伝えて、欲しい事があるの……。あの子に。今はまだいいけれど、時期が来たら……。私はそのときまで、生きられないから。」

搾り出すように言葉を発する。体調が悪くなったのかと思い、身構えた。

「あの子の、本当の・・・名前。。本当の名前は、・・・・・・・・。」

固まってしまった。本当の名前？良く意味が分からなかった。しかし、その本当の名前とやらは、一瞬にして、私の脳に張り付いた。

「美代子さん？・・・よく、意味が分からないのですが・・・。」

「あの子の・・・名前・・・小さい頃・・・違ったの・・・いろいろあつて・・・それも、時期が来れば・・・きつと分かる。」

「じ、時期って？いつのことですか？」

「あの子の父親は・・・きつとまだどこかで生きている・・・私たちを・・・探し続けてる・・・。。私は、信じてる。」

そこまで言って、目を閉じた。驚いて体をゆすってしまったが、すやすやと眠っているようだった。

それから二日後。美代子さんは自宅で静かに息を引き取った。

親戚とも遠縁で華蓮は誰もあつたことがないといった。そのためか葬儀も行わず、遺体を火葬場に移して火葬し、遺骨を拾った。

遺骨の入った箱を抱え、火葬場を後にするとき華蓮は、今まで見たことの無い綺麗な笑顔でこういった。

「カンちゃん。ありがとう。」

その声、表情は、今でも鮮明に思い出せるほど、深く胸へと突き刺さった。私は何もしていない。その一言すら、言うことができなかった。

次の日、華蓮が心配で朝家を訪ねたら、いつも以上に明るく、元気な華蓮がいた。もうちょっと落ち込んでよって、突っ込んだ記

憶がある。

そして美代子さんからの伝言をいまだに言えずにいる。

時期っていつなんだろう。このときのことを思うといつもそればかり考える。

（今、あの時とおんなじような雰囲気だし・もしかして、もうすぐ？華蓮が無口になるのは、美代子さんのことを考えているから？今も考えているのだろうか・・・。いや、違うことかもしれない。もしかして・父親のこと？・考えたってしょうがないか！）

隣で黙っている華蓮の横顔を、そつと見つめながら想った。

二年前（後書き）

主人公が中三の頃に母を亡くした時の物語。

実は私も母を小五の頃に亡くしています。しかしその時って、うまく理解できなくて、悲しむことさえできないんです。自分でもおかしいと思うほどテンションがあがってしまったり……。何年か経ってから悲しみって襲って来ます。も、めっちゃ時間差攻撃。やめてくり。

。ちよつと過去のお話。気になるところの真実はもう少し先で（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9174j/>

メモリーはすぐそばに・・

2011年10月6日19時02分発行